

国家天下の事、満鬱不平、吾^{われ}

一日も此世に居る事を欲せず。早々

一死を賜り候様、御周旋被下度候。^{くだされたく}

心事は一々不申共御察被下候而不^{もうさずとも くだされ てくるし}

苦候。杉蔵頻に母子の情を云、僕^{からず しきり いふ}

頗不満、然彼が母を思ふは猶吾^{すこぶる しかれども なおわれの}

思国なれば叱られもせず、杉蔵^{くにをおもうがごとく}

一事さへ議論遅遠する程なれば

政府何を能なさん。^{よく} 弁当事放囚事

移局のこと一々出来るとなりと出来ぬと

なりと早々御決議承^{うけたまわり} たし。杉蔵

母を奉する事、国相府弥御免なきに^{こくそうふいよいよ}

於ては杉蔵も亦男児なれば余り^{また}

未練は申間敷、杉蔵未練を^{もうすまじく}

止めさえすれば 雖在幽囚 吾豈^{ゆうしゆうにありといえどもわれあに}

無精神哉、武士の一覚悟^{せいしんなからんや}

屹きつと入御覽可申候事ごらんにいれもうすべく

松陰男子

来嶋君

小田村君

桂君

久保君

(以下略)